

十三 『孤松全稿』について—『黙斎艸』との関係

大久保 紀子

『孤松全稿』と『黙斎艸』はともに黙斎の著作集を指す名称である。この二つの名称について、我々の調査の結果から明らかになったことを整理し、それを通して『孤松全稿』の諸本およびその成立について考察する場合に必要な最も基礎的な部分を確定しておきたい。

(一) 黙斎の著作集の成立

梅澤芳男氏によれば、『孤松全稿』は黙斎の門人大木丹二^⑤によって編纂され、江戸在住当時の二五編の著作を収める前篇二五巻とその附録二巻、上総移住以降の二五編の著作を収める後篇二五巻とその附録二巻という構成であったとされている。この見解が正しいとすれば、大木丹二の没年である文政十(一八二七)年までに、前後の附録を合わせて計五四巻の『孤松全稿』が成立していたことになる。

梅澤氏の見解は、大木丹二が編纂したという根拠が示されていないために、またややおおまかな記述であるために不明な部分がある。たとえば大木丹二が「編纂」したとあるが、まったく無の状態から黙斎の全集を独自に編纂したのか、あるいは何らかの形でまとまっていたものを整理したのであるか。また大木丹二

によって編纂されたことを認めたとしても、『孤松全稿』という名称の成立はいつなのであろうか。

後者の『孤松全稿』という名称の成立については、管見の限りでは確とした年代を示すことはできない。黙斎は天明五（一七八五）年、五十四歳の時に所謂「孤松庵」に移ったといわれ、後に引用する寛政六（一七九四）年（黙斎六十三歳）の『甲寅雜記』には「孤松庵」の署名が見られる。しかし『孤松全稿』という名称については手がかりが見えず後考を待つ。

前者の黙斎の著作全集の編纂過程に関しては若干の知見を得た。梅澤氏によれば、大木丹二によって編纂された黙斎の著作全集は五四巻本で、前編は江戸在住当時の二五編を収めるということである。我々が調査した千葉県山武市成東の元倡寺所蔵の『孤松全稿』の第一巻の内題に「孤松全稿 前編一」とあり、「前編」が存在したことは確かであろう。

前編にあたる二五編の自筆稿本は、すでに黙斎自身によってまとめられてあったと考えられる。『孤松全稿』の一〇巻の跋に「右艸稿凡二十五卷正信所筆也（中略）庚子歲暮」^⑤とある。「庚子」とは、黙斎が上総に居を移す前年、安永九（一七八〇）年（黙斎四十九歳）のことである。この年、黙斎はそれまでの著作二五編を成立年代順にまとめて整理し、それを上総に持ち込んだと考えられる。それが著作全集の前編二五編の原型となった。^⑥ 附録については、誰がいつ頃編集したものか不明であるが、梅澤氏が述べるように大木丹二の手によるものかとも考えられる。

では、上総に移ってからの著作である後編についてはどうかといえば、寛政六（一七九四）年（黙斎六十三歳）の『甲寅雜記』までは、黙斎がまとめた自筆稿本があったことが確実である。元倡寺本『孤松全稿』の『甲寅雜記』の跋に次のようにある。

右予草稿起乎姫島講義。時甫二十一歳。迨今茲甲寅齡實六十三。此冬有故欲賣之。小川氏聞之輒出小判五金買之。予大喜書其後。

孤松庵 默叟（花押）

右依小川氏藏本直寫之

（元倡寺所藏『孤松全稿』、三二卷）

右予の草稿、『姫島講義』に起こり、時に甫めて二十一歳、今茲に甲寅に迫んで、齡實に六十三。此の冬故有つて之れを売らんとす。小川氏、之れを聞き輒ち小判を五金を出し之れを買ふ。予、大いに喜んで其の後に書す。

孤松庵 默叟（花押）

右、小川氏藏本に依つて直に之れを写す。

小川氏とは迂斎、および默斎に学んだ小川省義（享保十九「一七三四」年—文化十一「一八一四」年）のことである。^③この時小川氏が買ったのは一六冊であつたという。後館林藩にそのうち八冊が渡り、あとの八冊は小川氏が所蔵していたらしい。^④右の引用文に「小川氏藏本に依つて直に之れを写す」とあるのはそれを示している。默斎の手元に默斎が「草稿」と呼ぶ、『姫島講義』から寛政六年の雜記に至るまでの自筆稿本がまとめられていたのである。

以上のことから、默斎の著作集は默斎自身の手によつて、江戸在住当時の二五編が安永九年（一七八〇）年（默斎四十九歳）までにまとめられ、上総移住後も、寛政六年（一七九四）年（默斎六十三歳）まで毎年

雑記が加えられていったと考えられる。売却後も黙齋は毎年雑記を記し、その死後、大木丹二かいずれかの者の手によって、売却された分も含め、附録を加えられて全著作集が成立したものと考えられる。

(1) 『孤松全稿』の諸本

黙齋自身の自筆稿本は、右に述べたように寛政六（一七九四）年（黙齋六十三歳）に一六冊が小川氏に売却されたが、現存かどうかは不明である。館林藩に渡ったと伝えられる八冊は維新の兵火で喪われたとされている。^②

写本については不明な部分が多い。上総道学の最後の学徒であった田中謙蔵（蛇湖）氏は、かつて『孤松全稿』の完本は無窮会と池上文庫にそれぞれ一部ずつあり、不完本は成東小学校蔵に二部、田中氏所蔵のものが一部あると述べていた。^③しかし、田中氏の子息、池上幸次郎氏によれば、完本が現在の山武市成東の小学校に二部、現在の山武市湯坂の田原氏所蔵本が一部、計三部あり、不完本は無窮会本、白石正邦本、吉田英厚本、池上氏所蔵本があるとのことである。^④

このうち所在が明らかなのは、無窮会神習文庫所蔵の三九巻本（完本）である。しかし、残念なことこの無窮会所蔵本の由来については不明であり、ここに何も述べることができない。

ほかに成東の元倡寺に前編の三冊、前編の附録、後編の六冊、後編の附録を欠く全三〇冊が所蔵されている。元倡寺本には「鈴木常蔵本記」という蔵書印があり、欠本である巻、および一、四、十一、十二、二四巻を除いたすべてに「稲葉黙齋先生遺稿 山武郡成東町 出品人 鈴木順蔵」という後題簽が付けられている。元倡寺本は、もとはといえば、代々「常右衛門」を名乗る現在の山武市湯坂の鈴木家の蔵書であった。

鈴木家については、平成十二年に湯坂にある鈴木家の二箇所の墓所を調査した山口巖氏によって系譜が明らかにされた。四代にわたる当主の号と生没年は次のとおりである。栄誠（宝暦十二「一七六二」年—天保八「一八三七」年）、栄順（文化二「一八〇五」年—明治十七「一八八四」年）、信順（天保四「一八三三」年—明治三九「一九〇六」年）、そして昭和十三（一九三八）年に七十七歳で没した鈴木順蔵氏と続く家系である。栄順は、鈴木養斎、および奥平棲遅庵に学び、また、信順は、父、栄順を凌ぐ字才を称された。

この元倡寺本を筆写したのは誰かといえば、二つの可能性が考えられる。一つは、健筆で知られ『孤松全稿』全三九巻を筆写して師養斎を驚かせたという栄順である。しかし、もし、山口巖氏のように筆写が黙齋の存命中になされたと考えるならば、一代さかのぼって栄誠を筆写の主と考えることも可能である。

そのほか、『孤松全稿』の端本としては、千葉県立文書館の鎌倉家文書に合計四三冊がある。そのうち柱に「思齋蔵」とあつて梅澤芳男氏の蔵書であることがわかるものが一七冊、跋あるいは識から梅澤芳男氏の筆写であることが確実なものが二冊、「九鬼氏蔵書印」のあるものが一〇冊である。その他の端本とあわせると次の表一のように『孤松全稿』の後半にあたる部分が網羅されていることがわかる。つまり、鎌倉家文書の『孤松全稿』は「一〇（下）」以下の後半部分を写本や九鬼氏の蔵書、及び端本によって補うという意図のもとに集められたものであることが知られるのである。完本である無窮会神習文庫所蔵『孤松全稿』の巻番号をあげ、その該当分が千葉県立文書館鎌倉家文書にある（○）か否か（×）を柱、蔵書印別に示した。

新発田市立図書館は黙齋の著作の写本を多数所蔵しているが、そのうち『黙齋艸』の表記があるのは二冊、v09教書198とv09教書185である。前者は題簽に『黙齋艸』、内題に「黙齋艸卷一」、「黙齋艸卷二」の表記があり、「家蔵」、「新發田藩邸學問所」の蔵書印がある。後者は内題に「黙齋草卷十六」とあり、「新發田道學堂圖書印」、「家蔵」の蔵書印がある。

表一

無窮会所蔵本の巻番号。 (一) は分冊番号	柱に「思齋蔵」あるいは梅 澤氏の跋、識をもつ写本	「九鬼氏蔵書印」のある写本	その他
一から一〇	×	×	×
一〇(下)	○	×	×
一一から二一まで	○	×	×
二二から二七まで	×	×	×
二八から三六まで	×	×	○
三七	○	○	×
三八	×	○	×
三九	○	×	×

(三) 『孤松全稿』と『黙斎艸』

[1] 梅澤氏の見解

梅澤芳男氏によれば、『孤松全稿』も『黙斎艸』も稲葉黙斎の著作、語録の集大成であり、その所収している内容に違いはなく編集の方法が異なるだけであるとされている。⁽²⁵⁾ また、『黙斎艸』については、梅澤氏は、明治初年、後学が山崎闇斎の『垂加草』にならって『孤松全稿』を『黙斎艸』とよび、内容はそのまま

に巻数だけを三六巻、拾遺二巻、附録一卷の計三九巻に改めたものであると述べている。⁽¹⁶⁾『孤松全稿』では一巻一編であったものを改めて、一巻に複数編を所収し、全三九巻の『默齋艸』に編纂しなおしたというわけである。梅澤氏の見解をまとめれば、『孤松全稿』とは默齋の全著作集の五四巻本をいい、『默齋艸』とは同じくその三九巻本をいう。そして、『孤松全稿』の成立は文政十(一八二七)年以前、『默齋艸』の成立は明治初年にまで下るということになる。

しかし、梅澤氏の見解をにわかに信じることはできない。『孤松全稿』および『默齋艸』の成立については錯綜した事情があるうし、また確証となる文献を見いだせない以上、どのような見解も推測の域を出ないのであるが、少なくとも『默齋艸』の成立を明治初年であるとするのは無理である。なぜなら、新発田乙本(v09教書198)は「默齋艸卷一 姫島講義」という内題で始まる写本であるが、同じ頁に「新発田藩邸學問所」の印が押されているからである。新発田藩の江戸藩邸に學問所が設置されたのは、安永元(一七七二)年のことである。⁽¹⁷⁾

さらに、梅澤氏の見解では、默齋の全著作集を巻数の違いによって『孤松全稿』か『默齋艸』と呼ぶということがあるが、以下に述べる我々の調査によれば、默齋の全著作集を『默齋艸』と呼ぶ形跡は見い出せない。池上幸次郎氏は『孤松全稿』を三九巻四〇冊としている。⁽¹⁸⁾梅澤氏自身も、子安吟風筆「孤松全稿目録」の追補として記した文章の中で、本来ならば『默齋艸』と呼ばれるはずの三九巻本が『孤松全稿』と呼ばれていると述べている。つまり、五四巻本にせよ、三九巻本にせよ、默齋の全著作集はどのような場合でも『孤松全稿』と呼ばれ、『默齋艸』と呼ばれている例は調査の限りでは見えないのである。

[2] 調査の結果

五四巻本の『孤松全稿』は、管見の限りでは存在しないため、これについて考察を加えることはできない。しかし、無窮会神習文庫に三九巻本の、また千葉県山武市成東の元倡寺に最後の五巻を欠いた三四巻の『孤松全稿』が所蔵されている。これら二揃いの『孤松全稿』を調査した結果、『孤松全稿』と『黙斎艸』の関係について、梅澤氏とは異なる見方が可能であるという結論を得た。梅澤氏は『孤松全稿』と『黙斎艸』をいずれも黙斎の全著作集と考え、巻数だけが異なるものととらえているが、我々の調査によれば、『黙斎艸』とは黙斎の江戸在住当時の著作集であり、全著集である『孤松全稿』の一部であると位置づけることができる。『黙斎艸』として全著作集を編集することが企てられたことがあったのかもしれない。しかし、それは成立には至らず、『黙斎艸』は江戸在住当時の著作だけにどまったと考えられる。『孤松全稿』と『黙斎艸』の関係については、どのような見解も推測の域を出ないが、調査の結果にもとづいてこの仮説を提示してみた。^⑥

①『黙斎艸』の意義

後出の目録を一瞥すれば明らかなように、無窮会の神習文庫蔵および元倡寺所蔵の二揃いの『孤松全稿』は、梅澤氏が言う『黙斎艸』、三九巻の体裁をとっている。しかし、無窮会神習文庫所蔵本の三九巻にも、元倡寺所蔵本の三四巻にも、その全体を『黙斎艸』と呼ぶ形跡は見られない。たとえば、神習文庫所蔵本の場合は、第一巻に「孤松全稿目録」として三九巻の内容が記されており、所蔵分類上の名称も『孤松全稿』である。また、小口書に巻の番号が記されているが、第一巻や第五巻の小口書には番号とともに「孤松全稿」と記されている。さらに、第二巻では、所収している諸編の奥書に「孤松全稿」と記されている。元倡寺所蔵本では、題簽が剥落している、あるいは読めない場合を除けば、すべて「孤松全稿」という名称を含んだ

題簽がつけられている。我々が調査し得た『孤松全稿』は、いずれも三九卷本の『黙斎艸』の体裁をとりながら『孤松全稿』と呼ばれているのである。

ここで重要なのは、二揃いの書が『黙斎艸』と呼ばれるべき形をとりながら、『孤松全稿』と呼ばれているということではない。それならばすでに梅澤氏が指摘していることである。そうではなく、この二揃いの『孤松全稿』が示すことは、三九卷本においてもそれが黙斎の全著作集である限り『孤松全稿』と呼ばれるということなのである。そして、後述するように、どちらの『孤松全稿』においても『黙斎艸』の表記が一致して特定の部分だけに認められることに目を留めれば、これらの『孤松全稿』が、『黙斎艸』とは『孤松全稿』の一部であることを示していることに気づく。これが『黙斎艸』の第一義的な意味である。

次に『黙斎艸』の第二義的な意味について述べる。我々が調査し得た神習文庫所蔵本、及び元倡寺所蔵本の『孤松全稿』、そして千葉県立文書館所蔵鎌倉家文書の『孤松全稿』の端本、また新発田市立図書館所蔵の『孤松全稿』の端本の中の『黙斎艸』という表記の現れ方を一覧表にしてみると次のようになる。「『黙斎艸』の表記のある巻番号」の欄では神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本ではその巻数を示し、千葉県立文書館鎌倉家文書では該当する神習文庫所蔵本の巻数を示した。「『黙斎艸』の巻番号、附録の表記の有無」とはたとえば「黙斎艸巻三」あるいは「黙斎艸 附録」という表示があるか否かということである。「『孤松全稿』の表記の有無」の欄では、小口書あるいは題簽、内題に「孤松全稿」とある場合は有と記した。

表二

	神習文庫 所蔵本	元倡寺所 蔵本	千葉県立 文書館鎌 倉家文書
『黙斎艸』の表記 のある巻番号	一から一〇まで 一三	一から一〇まで	一〇にあたる一冊 一三にあたる一冊 三七にあたる一冊
『黙斎艸』の巻番号、 附録の表記の有無	有 無	有	有 無 無
『黙斎艸』の表記のある場所	各編の冒頭 冒頭 (黙斎艸 雑記 壬寅)	小口書、内題、各編の冒頭	冒頭 (黙斎艸 附録) 冒頭 (黙斎艸 雑記 壬寅) 冒頭 (黙斎艸 全書拾遺 完)
『孤松全稿』の表記 の有無	一、二、五巻のみ有 無	三巻を除き一から 一〇巻迄有	有 有 無

右の表から、『黙斎艸』の表記のある巻番号と、『黙斎艸』の巻番号、附録表記の有無の間に相関関係があることがわかる。『黙斎艸』の表記がある巻番号が、一から一〇までならば『黙斎艸』の巻番号が有り、巻番号が一以上になると『黙斎艸』の巻番号は無くなるのである。

これは偶然ではない。編集された『黙斎艸』ならば、当然『黙斎艸』としての巻番号が付されるはずである。『黙斎艸』の巻番号が付けられている第一巻から第一〇巻までは『黙斎艸』として編集された可能性が高い。そして、第一一巻以降はたとえ『黙斎艸』と冠せられていても、それは孤立した単編だったのではない。

いかと考えられる。この場合は、『黙斎艸』という名称が編集された著作集の名称としてではなく、黙斎の著作であるという意味で用いられているのではないだろうか。巻番号をとみなわない一一巻以降の『黙斎艸』は、このように理解することができる。

つまり、『黙斎艸』の第一義的な意味は『孤松全稿』の一部にあたる黙斎の著作集ということであるが、そのほかに、第二義的な意味として、孤立した単編に冠せられて黙斎の著作であることを示す場合があるということである。たとえば、表二の神習文庫所蔵本と千葉県立文書館鎌倉家文書の中に、『孤松全稿』の表記も、『黙斎艸』の巻番号、附録の表記もないながらも『黙斎艸』の表記をもつ写本が一冊ずつある。この二冊は『孤松全稿』からも独立して、また『黙斎艸』として編集された形跡も残さずに、『黙斎艸』と呼ばれる本があること、つまり『黙斎艸』が黙斎の著作であるという意味で用いられる場合があることを示している。

また、新発田市立図書館所蔵本の二冊は、神習文庫所蔵本でいえば、それぞれ一巻、六巻にあたるものでいずれも巻番号つきで『黙斎艸』という表記がある。これらは『黙斎艸』として編集された一〇巻の中の一冊を書写したものであろう。

②『孤松全稿』の中の『黙斎艸』の位置

表二から、神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本では一巻から一〇巻まで『黙斎艸』という表示があり、しかも『黙斎艸』の巻番号もあることから、『黙斎艸』が編集されたとするならば、これら二揃いの『黙斎艸』がその姿を示していると考えられる。

よって、神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本の一〇巻までの『黙斎艸』を対象として選び、第一義的な『黙斎

艸』の意味をさらに明らかにしていく。目録から明らかなように、神習文庫所蔵本でも元倡寺所蔵本でも、一巻の「姫島講義」から、一〇巻目の「奇峯録・示二三子談」までは一編ずつに「黙斎艸□」（□には、巻一あるいは単に一といった形で『黙斎艸』の巻番号を示す数字が入る）という表記がある。神習文庫所蔵本では各編の冒頭に、元倡寺所蔵本では小口書、及び各編の冒頭にその巻数とともに『黙斎艸』と記されている。表二からも明らかなように、『黙斎艸』とその巻数が冠されているのは、神習文庫所蔵本では一〇巻目までの二五編であり、元倡寺所蔵本ではそのうち三編を欠く。しかし、欠けている編を除けば、神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本との間に、編名と巻番号の対応について完全な一致が認められる。そして、『黙斎艸』という表記のある一〇巻までの二五編とは黙斎が江戸に在住していた時期の著作であり、一一巻以降は上総移住以降の毎年の雑記を主とする著作である。

つまり、我々の調査によれば、『黙斎艸』とは、第一義的には黙斎の江戸在住当時の著作二五編に付けられた名称であり、それは、本来の五四巻の『孤松全稿』の前編として編纂された部分にあたるということができる。『黙斎艸』は、黙斎の著作全体の編集を目指したものであったかもしれないが、全体としては成立にいたらず、江戸在住当時の著作だけにとどまったと考えられる。

ここで、黙斎自身が江戸を立つ前年、すでにこの二五編を自らの著作としてまとめたことを思い起こす必要がある。梅澤氏がいうところの大木丹二によって編纂された『孤松全稿』も、黙斎自らの編集に從ったのであろうか、江戸在住当時の二五編を前編としてまとめていた。江戸在住当時の二五編は、当初から独立し得る一まとまりのものとしてとらえられていたのである。後年、それが『黙斎艸』と呼ばれるようになったのではないだろうか。現在、黙斎の著作全体を『黙斎艸』と呼ぶ例が見つからない以上、この仮説は充分に考慮に値すると考えられる。

以上、梅澤氏が述べる本来の『孤松全稿』の形からしても、また我々の調査の結果からも、『孤松全稿』が默斎の著作全体の呼称であることは確かである。江戸在住当時から上総での終焉まで、默斎の全生涯の著作集を『孤松全稿』と呼ぶ。そして、『默斎艸』とは、『孤松全稿』という默斎の全著作集のうちの、江戸在住当時の著作二五編を指す名称であると結論することができる。

【注】

(一) 名は忠篤。現在の千葉県東金市北幸谷の人。文政十(一八二七)年、六十三歳で没した。默斎に非常に愛された門人の一人で、『乙卯二旬録』などを著した。

(二) 梅澤芳男編著『稻葉默斎先生と南総の道学』(ぺりかん社、一九八五年)、三四頁。

(三) 池上幸次郎「稻葉默斎先生(二)」、『東洋文化第百三十九號』、一九三六年、東洋文化學會、四五頁、梅澤芳男「默斎先生年譜」(前掲『稻葉默斎先生と南総の道学』、五四頁)。

(四) 目録参照。

(五) 『處士越復傳』解題参照。

(六) 原型というのは、自筆稿本は以下に述べるように売却され、大木丹二かいずれかの者が編纂した『孤松全稿』は写本であった可能性があるからである。

(七) 前掲『稻葉默斎先生と南総の道学』、一三〇頁。池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇 稻葉默齋先生傳』(一誠堂書店、一九三五年)所収の「稻葉默齋先生傳附録」には小川精義としてのっており東士川の人とある。また小川省義が默斎の窮状を救うために默斎の著作を買ったいきさつについては、田原綱三郎「上総における山崎学」(前掲『稻葉默斎先生と南総の道学』、一三〇頁—一三二頁)に述べられている。

(8) 同右。また黙齋の自筆の稿本の一部(『己酉雜記』(寛政元「一七八九」年)の部分)は前掲『吾學叢書第一篇 稻葉黙齋先生傳』の冒頭の迂齋、黙齋などの自筆の書を掲載している部分に縮小されてあげられている。

(9) 田中謙蔵「上総に於ける稻葉黙齋の遺蹟」、総編『蛇湖小品文』所収、三頁。

(10) 同右。

(11) 「稻葉黙齋先生(完)」、『東洋文化第百四十一號』(東洋文化學會、一九三六年)所収、四四頁。我々の調査によれば無窮会神習文庫所蔵本は完本である。

(12) 田原綱三郎「上総における山崎学」、前掲『稻葉黙齋先生と南総の道学』、一四八頁—一四九頁。

(13) 思齋は梅澤芳男氏の号である。山口巖氏によれば、梅澤氏は伊賀の書肆より『孤松全稿』を求めたが、不完本であったため、欠本にあたる部分を無窮会本を書写させて補って完本としたとのことである。後出の表二で無窮会神習文庫所蔵本の「壬寅 雜記」と千葉県立文書館の鎌倉家文書の「壬寅 雜記」の表記が一致しているのはそのためである。

(14) 鎌倉家文書の中に神習文庫所蔵本の巻数でいえば六卷に入るべき一編、『寸虎録』が所蔵されているが、省略した。

(15) 梅澤芳男「黙齋先生遺著要略」、前掲『稻葉黙齋先生と南総の道学』(ぺりかん社、一九八五年)所収。

(16) 前掲書、三七頁—三八頁。

(17) 新発田市史編纂委員会編『新発田市史上巻』(新発田市、一九八〇年、四五五頁)。廃藩は明治四「一八七一」年。

- (18) 「稲葉默斎先生（完）」、『東洋文化第百四十一號』（東洋文化學會、一九三六年）所収、四四頁。
- (19) 子安吟風は明治四十（一九〇七）年、七十七歳で没した。現在の東金市荒生の人。大木丹二の門人であった子安義知の子。朽木為斎に学び、閩流の和算家でもあった。
- (20) 元倡寺所蔵の『孤松全稿』は、欠本があり、また小口書に「默斎艸」という表示があつてやや問題を複雑にしているが、この二点は大勢に影響はないのでこたわらずに論を進めていくこととする。
- (21) 以下神習文庫所蔵本という。

第三部 上総道学についての関連論文と資料

◎『孤松全稿』所蔵一覧表

無窮会			燕木文庫	元倡寺		新発田市立図書館
巻 冊	一卷目録書名		書名	冊 黙齋艸	内容	No. 書名（外題）
1	1	姫島講義 [※] 餘論 堙旒録 三郎稿		1 黙齋艸 1 黙齋艸 2 黙齋艸 3	姫島講義 堙旒録 三郎稿	186 姫島講義 198 姫島講義 堙旒録 214 堙旒録 540 三郎稿
2	2	内艱割記 話録		2 黙齋艸 5	話録	196 黙齋先生話録
3	3	外艱割記 先君子行實 若松草		3 黙齋艸 6 黙齋艸 8	外艱割記 若松草	182 外艱割記 213 汪齋先生行實
4	4	處土越復傳 若松夜話 牛嶋随筆 先達遺事		4 黙齋艸 9 黙齋艸 10 黙齋艸 11	處土越復傳 若松夜話 牛嶋随筆 上中 下	203 先達遺事
5	5	墨水一滴 西遊轡録 新泉草		5 黙齋艸 13 黙齋艸 14 黙齋艸 15	墨水一滴 西遊轡録 新泉草	
6	6	排釈録 寸虎録	寸虎録	6 黙齋艸 16 黙齋艸 17	排釈録 寸虎録	185 排釈録筆記
7	7	新屋筆録 再遊瑣録		7 黙齋艸 18 黙齋艸 19	新屋筆録 再遊瑣録	549 再遊瑣録
8	8	丁酉雜記		8 黙齋艸 20	丁酉雜記	
9	9	燕閑録 西南録 蹊澗録		9 黙齋艸 21 黙齋艸 22 黙齋艸 23	燕閑録 西南録 蹊澗録	180 燕閑西南二録 3 蹊澗録
10	10	五旬引 仲夏雜記 奇峯録 示二三子談		10 黙齋艸 24 黙齋艸 25	五旬引 仲夏雜記 奇峯録 示二三子談	184 (学談) 五旬引 (感興詩旁解) 296 奇峯録 252 示二三子談
10	10	附録 下	附録 拾 下			181 婦人の心得 184 学談 (五旬引) 感興詩旁解 187 稲葉黙齋先生学談
11	11	辛丑雜記 上	辛丑雜記 上	11 雜記	雜記 辛丑 上	
12	12	辛丑雜記 下	辛丑雜記 中 辛丑雜記 下	12 雜記	雜記 辛丑 下	
13	13	壬寅雜記 上	壬寅雜記 上	13 雜記	雜記 壬寅 上	
14	14	壬寅雜記 下	壬寅雜記 下	14 雜記	雜記 壬寅 下	
15	15	癸卯雜記 上	癸卯雜記 (1-6)	15 雜記	雜記 癸卯 一	

十三 『孤松全稿』解題—『孤松全稿』と『黙斎艸』—

16	16	癸卯雜記 下	癸卯雜記 (7-8)		16	雜記	雜記 癸卯 二		
	17		癸卯雜記 (8-9)						
	18		癸卯雜記 (10-11)						
			癸卯雜記 (12-14)						
17	19	甲辰雜記	甲辰雜記 ①		17	雜記	雜記 甲辰	197	黙齋先生雜記 甲辰、戊申、己酉、乙卯 (→見花稿)
			甲辰雜記 ②						
18	20	乙巳雜記	乙巳雜記		18	雜記	雜記 乙巳		
19	21	丙午雜記	丙午雜記 ①						
	22		丙午雜記 ②						
20	23	丁未雜記	丁未雜記		20	雜記	雜記 丁未		
21	24	戊申雜記	戊申雜記		21	雜記	雜記 戊申		
22	25	己酉雜記	己酉雜記		22	雜記	雜記 己酉		
23	26	庚戌雜記	庚戌雜記		23	雜記	雜記 庚戌		
24	27	辛亥雜記	辛亥雜記		24	雜記	雜記 辛亥		
25	28	一六談柄 上	一六課會記 上中下					170	一六課会 上
	29								
26	30	一六談柄 下之一			26	雜記	一六談柄下之一		
27	31	一六談柄 下之二							
	32								
	33								
28	34	壬子雜記 上	壬子雜記上	壬子雜記	28	雜記	雜記 壬子 上		
29	35	壬子雜記 下	壬子雜記下						
30	36	癸丑雜記	癸丑雜記	癸丑雜記	30	雜記	雜記 癸丑	781	雜記 癸丑
31	37	甲寅雜記	甲寅雜記	甲寅雜記	31	雜記	雜記 甲寅		
32	38	見花稿	見花稿	見花稿	32		見花稿		
33	39	雪梅草	雪梅草	雪梅草	33		雪梅草		
34	40	重雪草	重雪草	重雪草	34		重雪草		
35	41	六七録	六七録	六七録					
36	42	六八録	六八録	六八録					
37	43	拾遺上	全書拾遺	全書拾遺					
38	44	拾遺下	代魄録					78	代魄録
39	※	斯事談	斯事談						
※は分冊 No.なし。			私抄上						
			私抄下						

無窮会本…財団法人無窮会専門図書館（東京都町田市玉川学園）所蔵・神習文庫所収本（蔵書番号一三五一一三）。縦24・3 cm×横16・0 cm、表紙・格子縞灰色（ただし、七分冊・十_下分冊は格子縞青）。〔平成十二年六月十八日・七月九日調査〕

蕪本文庫本…千葉県立文書館所蔵・蕪本文庫（鎌倉家文書）所収本。縦27・4 cm×横19・7 cm、表紙・薄茶色、異なる体裁あり。〔平成十六年一月十七日調査〕

元倡寺本…元倡寺（千葉県山武市成東）所蔵本。縦24・3 cm×横16・7 cm、表紙・青。〔平成十五年九月七日調査〕

新発田本…新潟県新発田市立図書館所蔵本。体裁は区々。〔平成十二年七月二十五日調査〕